国際研究論叢　35（2）：159 ～ 168, 2022

研究ノート

形容詞・形容動詞の歴史的変遷
－上代から中古、そして中古から中世へ－

村　田　菜穂子＊1　　前　川　　武＊2

Historical Transition of Adjectives and Adjectival Nouns: From ancient times to the Heian period and from the Heian period to the Middle Ages

Nahoko Murata＊1　　Takeshi Maekawa＊2

Abstract

We have analyzed and considered the adjectives used in the ancient works, the anthology of eight poems, prose works from the Heian period and documents written in the Middle Ages from the standpoint of vocabulary research and vocabulary history research.

This article discusses about how the use of simple adjectives, compound adjectives, and adjectival nouns (na-adjectives) has changed over time from ancient times to the Heian period and from the Heian period to the Middle Ages.

キーワード

単純形容詞　合成形容詞　形容動詞　歴史的変遷　上代　中古　中世

はじめに

これまで、稿者は語彙研究および語彙史研究の立場から、上代、中古、そして、中世の資料で使用された形容詞を採取し、異なり語数という観点から各時代の形容詞の体系を分析・考察し、その一方で、延べ語数に焦点を当ててそれぞれの形容詞がどの資料でどのくらい使用されているかという運用実態を分析して量的な観点について考察を行ってきた。

また、これらの調査と同時に、採取した形容詞一つ一つについて、質的な特質を捉えるべく、語構造や造語という観点、すなわち語構成を分析し、上代・中古・中世という共時態における形容詞語彙の質的側面に関する特徴についても分析・考察してきた(注1)。

＊1　むらた　なほこ：大阪国際大学基幹教育機構教授〈2021. 9. 17 受理〉
＊2　まえかわ　たけし：大阪国際大学短期大学部教授

こうした一連の分析研究は、次に待ち受ける形容詞・形容動詞語彙に関する歴史的変遷、すなわち、通時的な語彙史ないし語構成史の研究を進めたいがためであったが、意外にも、形容詞の産出は派生や複合という方式、すなわち、「 X +形容詞」という形式による自己増殖が中心であり、時代が下るにつれ、出発点となる「一次的な形容詞」の産出がほとんど行われていない実態を知るに至った。（なお、ここでは、便宜上、前者の方式で形成された語を「合成形容詞」、後者のような一次的な語を「単純形容詞」と呼ぶことにする。）

また、このような単純形容詞に代わって合成形容詞が増殖していく一方で、意義的な面において軌を一にする形容動詞の動向を形容詞と関連付けて論じてこなかったことをふり返り、本稿では広義の形容語（形容詞および形容動詞）の変遷の過程を見るために、形容動詞も視野に入れた分析・考察を行うことにする。

なお、本稿では上代、中古、中世と時代区分を以下のように対応づける(注2)。

上代：奈良時代

中古：平安時代（平安時代前期および平安時代後期、以下、平安時代前期を「平安前期」、平安時代後期を「平安後期」と呼ぶ）

中世：鎌倉時代、室町時代

以上、本稿では、単純形容詞、合成形容詞、および形容動詞の使用のあり方が上代から中古にかけて、そして、中古から中世にかけて、時代とともにどのように変遷をしているかを見ていく。

一　考察の対象

さて今回、考察の対象としたのは、奈良時代から室町時代までの形容詞、形容動詞で、形容詞は、「はじめに」で述べた単純形容詞と合成形容詞に分ける必要があるため、『日本語歴史コーパス』(注3)（以下「CHJ」と言う）の長単位データより抽出することとした。

ここでCHJとCHJの長単位データについて簡単に説明しておく。

まず、CHJとは古典語作品のテキストデータを形態素解析という技術を用いて形態素と呼ばれる言語単位に分解し、一つ一つの語に、「前文脈」や「後文脈」、「品詞」、「本文種別」、「話者」、「作品名」などの情報を付加したものであり、収録されている作品は以下のとおりである。

奈良時代

『万葉集』『続日本紀』『延喜式』（『延喜式』は短単位のみ）

平安前期

『竹取物語』『古今和歌集』『伊勢物語』『土佐日記』『大和物語』『後撰和歌集』『平中物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』

平安後期

『枕草子』『拾遺和歌集』『源氏物語』『紫式部日記』『和泉式部日記』『堤中納言物語』『更級日記』『後拾遺和歌集』『大鏡』『讃岐典侍日記』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』

鎌倉時代

『今昔物語集』(注4)（本朝部のみ）『新古今和歌集』『方丈記』『宇治拾遺物語』『海道記』『建礼門院右京大夫集』『東関紀行』『十訓抄』『十六夜日記』『とはずがたり』『徒然草』

室町時代

『天草版平家物語』『天草版伊曽保物語』『虎明本狂言集』

ところで、CHJ には用例収集を目的とした短単位と言語的特徴の解明を目的とした長単位の２種類の言語単位がある。短単位は、言語の形態的側面に着目して規定した言語単位であり、短単位の認定にあたっては、まず意味を持つ最小の単位（最小単位）を規定し、その最小単位を文節の範囲内で短単位認定規程に基づいて結合させる（もしくは結合させない）ことで認定する。長単位は、言語の構文的な機能に着目して規定した言語単位であり、長単位の認定は、文節の認定を行った上で、各文節の内部を規定に従って自立語部分と付属語部分とに分割していくという手順で行う(注5)。

例えば､「等閑無し」は短単位では「等閑」＋「無し」の２語に認定されるが長単位では「等閑無し」の１語として認定されるという具合である。

したがって、今回は CHJ の長単位データを利用することとした。抽出した語は、形容詞延べ 72470 語（うち単純形容詞 60551 語、合成形容詞 11700 語）、形容動詞（CHJ では「形状詞」としている）延べ 22509 語である。

二　上代から中古にかけての変遷

まずは、上代（奈良時代）から中古（平安時代）にかけての変遷を見ていく。

表１は、奈良時代から平安後期までの時代別・作品別の単純形容詞、合成形容詞、形容動詞の延べ語数と、これら三者を全体としたときの割合を作品の成立年順に並べたものである。これを見ると、時代が下るにつれて単純形容詞の割合が概ね減少しているように見えるが、『万葉集』『古今和歌集』などの歌集はその限りではない。

この状況を踏まえつつ、次に、表１を時代単位毎に集計したものが表２である。そしてさらに、時代およびジャンル毎で集計し、時代別に単純形容詞の割合の高い順に並べたものが表３である。

表２からは、時代が下がるにつれて単純形容詞の割合が減少していき、その分、合成形容詞と形容動詞の割合が増えている様相がよくわかる。特に平安後期には単純形容詞の割合が 62.9％まで減少する一方、形容動詞の割合が 20％を超えるまで増加してきている。

また、表３からは、時代を問わず、「歌集」というジャンルの単純形容詞の割合が高いことがわかることに加えて、平安前期において、「歌集」以外のジャンルではほとんど差がなく、形容動詞の割合が 20％弱程度で推移している様相が読み取れる。また、平安後期において､「歌集」以外のジャンルでは「随筆」の合成形容詞が他より低いことがすこぶる特徴的である一方、このほかは、ほとんど差がなく、形容動詞の割合が 25％前後の値で推移している様相が見てとれる。もっとも、平安後期の随筆は『枕草子』のみであるので、『枕草子』独自の表現法というべきであろう。

表１　時代別・作品別　単純形容詞・合成形容詞・形容動詞の延べ語数・割合

（奈良～平安時代）

成立年	時代	作品名	延べ語数			割合（%）		
			単純形容詞	合成形容詞	形容動詞	単純形容詞	合成形容詞	形容動詞
759	奈良	万葉集	2300	324	330	77.9	11.0	11.2
797		続日本紀	509	14	65	86.6	2.4	11.1
900	平安前期	竹取物語	223	48	58	67.8	14.6	17.6
905		古今和歌集	602	78	96	77.6	10.1	12.4
920		伊勢物語	276	55	76	67.8	13.5	18.7
934		土佐日記	162	25	37	72.3	11.2	16.5
951		大和物語	562	100	94	74.3	13.2	12.4
955		後撰和歌集	917	135	116	78.5	11.6	9.9
960		平中物語	260	53	58	70.1	14.3	15.6
974		蜻蛉日記	1471	273	418	68.0	12.6	19.3
986		落窪物語	1921	348	457	70.5	12.8	16.8
1001	平安後期	枕草子	3116	313	715	75.2	7.6	17.3
1005		拾遺和歌集	756	110	74	80.4	11.7	7.9
1010		源氏物語	17035	4902	6885	59.1	17.0	23.9
1010		紫式部日記	627	112	209	66.1	11.8	22.0
1010		和泉式部日記	330	110	115	59.5	19.8	20.7
1055		堤中納言物語	561	130	214	62.0	14.4	23.6
1059		更級日記	486	104	165	64.4	13.8	21.9
1087		後拾遺和歌集	764	87	117	78.9	9.0	12.1
1100		今昔物語集	9294	1633	3922	62.6	11.0	26.4
1100		大鏡	1497	235	521	66.4	10.4	23.1
1110		讃岐典侍日記	363	75	162	60.5	12.5	27.0
1128		金葉和歌集	352	44	52	78.6	9.8	11.6
1151		詞花和歌集	232	25	30	80.8	8.7	10.5
1188		千載和歌集	639	67	96	79.7	8.4	12.0

表２　時代別 単純形容詞・合成形容詞・形容動詞の延べ語数・割合

（奈良～平安時代）

時代	延べ語数			割合（%）		
	単純形容詞	合成形容詞	形容動詞	単純形容詞	合成形容詞	形容動詞
奈良	2809	338	395	79.3	9.5	11.2
平安前期	6394	1115	1410	71.7	12.5	15.8
平安後期	36052	7947	13277	62.9	13.9	23.2

ここで、上代から中古に至る変遷についてまとめておこう。

まず、奈良時代の対象作品は『続日本紀』（宣命）と『万葉集』で、どちらも単純形容詞の割合が高いが、『続日本紀』は合成形容詞の割合が極端に低い。また、この内訳は、イヤナシ（礼無し）が６回、タビマネシ（度多し）が２回、タヤスシ（容易し）が２回、ココ

表３　時代別・ジャンル別 単純形容詞・合成形容詞・形容動詞の延べ語数・割合

（奈良～平安時代）

時代	ジャンル	延べ語数			割合（%）		
		単純形容詞	合成形容詞	形容動詞	単純形容詞	合成形容詞	形容動詞
奈良	宣命	509	14	65	86.6	2.4	11.1
	歌集	2300	324	330	77.9	11.0	11.2
平安前期	歌集	1519	213	212	78.1	11.0	10.9
	歌物語	1098	208	228	71.6	13.6	14.9
	作り物語	2144	396	515	70.2	13.0	16.9
	日記	1633	298	455	68.4	12.5	19.1
平安後期	歌集	2743	333	369	79.6	9.7	10.7
	随筆	3116	313	715	75.2	7.6	17.3
	歴史物語	1497	235	521	66.4	10.4	23.1
	日記	1806	401	651	63.2	14.0	22.8
	説話	9294	1633	3922	62.6	11.0	26.4
	作り物語	17596	5032	7099	59.2	16.9	23.9

ロナシ（心無し）、タズカナシ（方便無し）、トオナガシ（遠長し）、ヨシナシ（由無し）と、異なり語数にすれば７にすぎず、『続日本紀』が全般に記述が簡潔で、史実の要点のみを記す傾向が強いことが関係していると考えられる。一方、『万葉集』は韻文という性質上、音節数の多い語はむしろ避けられることが考えられ、合成形容詞の延べ語数 324 の内訳は、マナシ（間無し）などの３音節語が 87、スミヨシ（住み良し）などの４音節語が 128、トホナガシ（遠長し）などの５音節語が 88、オボツカナシ（覚束無し）などの６音節語が 13、ウツロイヤスシ（移ろい易し）などの７音節語が８と、４音節語を中心に、３音節語、５音節語がこれに続いており、６音節語、７音節語は極端に少ない様相が見て取れる。

このように、形容詞は、上代においては主として単純形容詞が用いられたが、後には単純形容詞が他の要素と結合した合成形容詞が形成され、平安前期、平安後期においては合成形容詞の割合が伸張している。

次に形容動詞だが、特に上代の形容動詞については注意が必要である。それは、上代に用いられている形容動詞は延べ語数が 395 で、割合にすると 11.1％だが、395 例のうち 363 例が「ツバラニ（審らに）」のように「～に」の形式でしか用いられておらず、国語史的に見て、「～に」の形式以外がない段階では副詞とすべきものである。残り 32 例は「カタクナル（頑なる）」「アラタナレ（新たなれ）」など、語尾が変化している、すなわち活用していると捉えることができるもの 15 例、「オオキ（大き）」等接頭語ないしは形容詞の語幹と考えられるもの 17 例となっており、上代における形容動詞の認定は検討を続けつつ、慎重な態度でありたいと考えている。

三　中古から中世にかけての変遷

続いて、中古（平安時代）から中世（鎌倉時代および室町時代）に至る変遷を見ていく。まずは、単純形容詞・合成形容詞・形容動詞の延べ語数とその割合の推移を見てみよう。

表４は平安前期から室町時代までの時代毎に単純形容詞・合成形容詞・形容動詞の延べ語数・割合を算出したもので、表５は時代およびジャンル毎で集計し、時代別に単純形容

表４　時代別 単純形容詞・合成形容詞・形容動詞の延べ語数・割合

（平安～室町時代）

時代	延べ語数			割合（%）		
	単純形容詞	合成形容詞	形容動詞	単純形容詞	合成形容詞	形容動詞
平安前期	6394	1115	1410	71.7	12.5	15.8
平安後期	36052	7947	13277	62.9	13.9	23.2
鎌倉	8642	1515	2693	67.3	11.8	21.0
室町	6014	742	3897	56.5	7.0	36.6

表５　時代別・ジャンル別 単純形容詞・合成形容詞・形容動詞の延べ語数・割合

（平安～室町時代）

時代	ジャンル	延べ語数			割合（%）		
		単純形容詞	合成形容詞	形容動詞	単純形容詞	合成形容詞	形容動詞
平安前期	歌集	1519	213	212	78.1	11.0	10.9
	歌物語	1098	208	228	71.6	13.6	14.9
	作り物語	2144	396	515	70.2	13.0	16.9
	日記	1633	298	455	68.4	12.5	19.1
平安後期	歌集	2743	333	369	79.6	9.7	10.7
	随筆	3116	313	715	75.2	7.6	17.3
	歴史物語	1497	235	521	66.4	10.4	23.1
	日記	1806	401	651	63.2	14.0	22.8
	説話	9294	1633	3922	62.6	11.0	26.4
	作り物語	17596	5032	7099	59.2	16.9	23.9
鎌倉	歌集	1355	217	254	74.2	11.9	13.9
	説話	3774	593	1266	67.0	10.5	22.5
	日記	1635	335	492	66.4	13.6	20.0
	随筆	1287	239	411	66.4	12.3	21.2
	紀行	591	131	270	59.6	13.2	27.2
室町	狂言	4392	446	2900	56.8	5.8	37.5
	キリシタン資料	1622	296	997	55.6	10.2	34.2

詞の割合の高い順に並べたものである。

表４からは、表２と同様に、時代が下るにつれて単純形容詞の割合が減少していく様相が認められ、その分、合成形容詞と形容動詞の割合が増えていき、特に室町時代になると、形容動詞が 36.6％と大幅に増加していることが読み取れる。ここで、平安後期と鎌倉時代で数値が逆転しているのは、平安後期の『今昔物語集』の規模が大きいためにその影響が反映されていると思われるが、巨視的に見て、平安後期から鎌倉時代にかけては、過渡的な状況と考えるのが妥当であろう。

また、表５からは、表３と同じく、時代を問わず「歌集」の単純形容詞の割合が高い様相が認められる。他方、「歌集」以外のジャンルにおいては、平安後期から鎌倉時代にかけて同程度の割合で推移している。しかし、室町時代になると、単純形容詞、合成形容詞の割合はともに減少し、その一方、形容動詞の割合はその分大幅に増加している。これらのことから、平安後期から鎌倉時代にかけては、平安前期から室町時代に至る間の過渡的な状況を物語っているものと捉えることができるのではないだろうか。

四　上代から中世までの変遷

これまで見てきたように、対象とした全時代を通じて「歌集」では単純形容詞の割合が高いという様相が見て取れた。これは非常に興味深い様相である。

これを踏まえ、上代から中世までの全作品を単純形容詞の割合の降順に並べてみたのが表６である。

これを見ると、『続日本紀』はひとまず措くとして、見事に上位に「歌集」が並んでいる。そうした中、『万葉集』では意外にも形容動詞の割合が平安時代の「歌集」よりも高くなっていることに注意する必要がある。第二節最終部分で触れたように、CHJ に基づいた場合、上代における形容動詞の認定については従来の国語史の見方と一致していない点に対して注意が必要であり、この時点では形容動詞として認定すべきでないものも含まれている可能性があるため、実質的には形容動詞の割合はこれほど高くなく、単純形容詞の割合はもっと高くなると捉えるのが適当であるかもしれない。

やはり、和歌の世界では、伝統的な語が好まれ、派生や複合によって形成された合成形容詞や活用を得て進化した語は避ける傾向があることがあらためて確認できたと言えよう。

次に、上代から中世にかけての全体を概観するために、表６を作品の成立年順に並べて表７とした。表７を見ると、歌集以外に特徴的なこととしては、単純形容詞の割合が下るにつれて、合成形容詞の割合も増加するものの、一定の水準で止まっているのに対して、形容動詞の割合の増加に拍車がかかっていることが挙げられる。

また、個別の作品に注目すると、『枕草子』と『方丈記』の合成形容詞の使用割合が歌集以上に低いことは注意しておく必要がある。

表６　成立年別　単純形容詞・合成形容詞・形容動詞の延べ語数・割合

（単純形容詞の割合の降順）

成立年	時代	作品名	ジャンル	延べ語数			割合（%）		
				単純形容詞	合成形容詞	形容動詞	単純形容詞	合成形容詞	形容動詞
797	奈良	続日本紀	宣命	509	14	65	86.6	2.4	11.1
1151	平安後期	詞花和歌集	歌集	232	25	30	80.8	8.7	10.5
1005	平安後期	拾遺和歌集	歌集	756	110	74	80.4	11.7	7.9
1188	平安後期	千載和歌集	歌集	639	67	96	79.7	8.4	12.0
1087	平安後期	後拾遺和歌集	歌集	764	87	117	78.9	9.0	12.1
1128	平安後期	金葉和歌集	歌集	352	44	52	78.6	9.8	11.6
955	平安前期	後撰和歌集	歌集	917	135	116	78.5	11.6	9.9
759	奈良	万葉集	歌集	2300	324	330	77.9	11.0	11.2
1205	鎌倉	新古今和歌集	歌集	867	117	131	77.8	10.5	11.7
905	平安前期	古今和歌集	歌集	602	78	96	77.6	10.1	12.4
1001	平安後期	枕草子	随筆	3116	313	715	75.2	7.6	17.3
1212	鎌倉	方丈記	随筆	150	9	41	75.0	4.5	20.5
951	平安前期	大和物語	歌物語	562	100	94	74.3	13.2	12.4
934	平安前期	土佐日記	日記	162	25	37	72.3	11.2	16.5
986	平安前期	落窪物語	作り物語	1921	348	457	70.5	12.8	16.8
960	平安前期	平中物語	歌物語	260	53	58	70.1	14.3	15.6
1232	鎌倉	建礼門院右京大夫集	歌集	488	100	123	68.6	14.1	17.3
1220	鎌倉	宇治拾遺物語	説話	2237	287	737	68.6	8.8	22.6
974	平安前期	蜻蛉日記	日記	1471	273	418	68.0	12.6	19.3
920	平安前期	伊勢物語	歌物語	276	55	76	67.8	13.5	18.7
900	平安前期	竹取物語	作り物語	223	48	58	67.8	14.6	17.6
1100	平安後期	大鏡	歴史物語	1497	235	521	66.4	10.4	23.1
1306	鎌倉	とはずがたり	日記	1635	335	492	66.4	13.6	20.0
1010	平安後期	紫式部日記	日記	627	112	209	66.1	11.8	22.0
1336	鎌倉	徒然草	随筆	1137	230	370	65.5	13.2	21.3
1252	鎌倉	十訓抄	説話	1537	306	529	64.8	12.9	22.3
1059	平安後期	更級日記	日記	486	104	165	64.4	13.8	21.9
1100	平安後期	今昔物語集	説話	9294	1633	3922	62.6	11.0	26.4
1280	鎌倉	十六夜日記	紀行	172	43	60	62.5	15.6	21.8
1055	平安後期	堤中納言物語	作り物語	561	130	214	62.0	14.4	23.6
1110	平安後期	讃岐典侍日記	日記	363	75	162	60.5	12.5	27.0
1010	平安後期	和泉式部日記	日記	330	110	115	59.5	19.8	20.7
1242	鎌倉	東関紀行	紀行	153	46	59	59.3	17.8	22.9
1010	平安後期	源氏物語	作り物語	17035	4902	6885	59.1	17.0	23.9
1223	鎌倉	海道記	紀行	266	42	151	58.0	9.2	32.9
1642	室町	虎明本狂言集	狂言	4392	446	2900	56.8	5.8	37.5
1592	室町	天草版平家物語	キリシタン資料	1302	241	761	56.5	10.5	33.0
1593	室町	天草版伊曽保物語	キリシタン資料	320	55	236	52.4	9.0	38.6

表７　成立年別　単純形容詞・合成形容詞・形容動詞の延べ語数・割合

（成立年順）

成立年	時代	作品名	ジャンル	延べ語数			割合（%）		
				単純形容詞	合成形容詞	形容動詞	単純形容詞	合成形容詞	形容動詞
759	奈良	万葉集	歌集	2300	324	330	77.9	11.0	11.2
797	奈良	続日本紀	宣命	509	14	65	86.6	2.4	11.1
900	平安前期	竹取物語	作り物語	223	48	58	67.8	14.6	17.6
905	平安前期	古今和歌集	歌集	602	78	96	77.6	10.1	12.4
920	平安前期	伊勢物語	歌物語	276	55	76	67.8	13.5	18.7
934	平安前期	土佐日記	日記	162	25	37	72.3	11.2	16.5
951	平安前期	大和物語	歌物語	562	100	94	74.3	13.2	12.4
955	平安前期	後撰和歌集	歌集	917	135	116	78.5	11.6	9.9
960	平安前期	平中物語	歌物語	260	53	58	70.1	14.3	15.6
974	平安前期	蜻蛉日記	日記	1471	273	418	68.0	12.6	19.3
986	平安前期	落窪物語	作り物語	1921	348	457	70.5	12.8	16.8
1001	平安後期	枕草子	随筆	3116	313	715	75.2	7.6	17.3
1005	平安後期	拾遺和歌集	歌集	756	110	74	80.4	11.7	7.9
1010	平安後期	源氏物語	作り物語	17035	4902	6885	59.1	17.0	23.9
1010	平安後期	紫式部日記	日記	627	112	209	66.1	11.8	22.0
1010	平安後期	和泉式部日記	日記	330	110	115	59.5	19.8	20.7
1055	平安後期	堤中納言物語	作り物語	561	130	214	62.0	14.4	23.6
1059	平安後期	更級日記	日記	486	104	165	64.4	13.8	21.9
1087	平安後期	後拾遺和歌集	歌集	764	87	117	78.9	9.0	12.1
1100	平安後期	今昔物語集	説話	9294	1633	3922	62.6	11.0	26.4
1100	平安後期	大鏡	歴史物語	1497	235	521	66.4	10.4	23.1
1110	平安後期	讃岐典侍日記	日記	363	75	162	60.5	12.5	27.0
1128	平安後期	金葉和歌集	歌集	352	44	52	78.6	9.8	11.6
1151	平安後期	詞花和歌集	歌集	232	25	30	80.8	8.7	10.5
1188	平安後期	千載和歌集	歌集	639	67	96	79.7	8.4	12.0
1205	鎌倉	新古今和歌集	歌集	867	117	131	77.8	10.5	11.7
1212	鎌倉	方丈記	随筆	150	9	41	75.0	4.5	20.5
1220	鎌倉	宇治拾遺物語	説話	2237	287	737	68.6	8.8	22.6
1223	鎌倉	海道記	紀行	266	42	151	58.0	9.2	32.9
1232	鎌倉	建礼門院右京大夫集	歌集	488	100	123	68.6	14.1	17.3
1242	鎌倉	東関紀行	紀行	153	46	59	59.3	17.8	22.9
1252	鎌倉	十訓抄	説話	1537	306	529	64.8	12.9	22.3
1280	鎌倉	十六夜日記	紀行	172	43	60	62.5	15.6	21.8
1306	鎌倉	とはずがたり	日記	1635	335	492	66.4	13.6	20.0
1336	鎌倉	徒然草	随筆	1137	230	370	65.5	13.2	21.3
1592	室町	天草版平家物語	キリシタン資料	1302	241	761	56.5	10.5	33.0
1593	室町	天草版伊曽保物語	キリシタン資料	320	55	236	52.4	9.0	38.6
1642	室町	虎明本狂言集	狂言	4392	446	2900	56.8	5.8	37.5

おわりに

今回の考察の目的は、単純形容詞、合成形容詞、および形容動詞の使用のあり方が上代から中世にかけて、時代とともにどのように変遷をしているかを見ていくことであった。

これまでの検証で、時代が下るにつれて単純形容詞の割合が減少し、合成形容詞と形容動詞に移っていくことがわかった。さらに、合成形容詞と形容動詞とを比較すると、歌集を除けば、平安前期では両者が拮抗するケースもあるが、平安後期からは形容動詞が徐々に台頭していき、室町時代になると、圧倒的に形容動詞が優勢になることが明らかになったと言える。

以上、本稿では、大きな流れとして単純形容詞、合成形容詞、および形容動詞の使用のあり方を見てきたが、合成形容詞においてはク活用・シク活用の差異、形容動詞においては、タリ活用・ナリ活用の差異があるだけでなく、対象とした作品についても、文体差や作品規模の違いもあることから、それらにも目を向け、次回はその辺りの要素も考慮してさらなる考察を試みたい。

【付記】 本稿は、日本学術振興会令和 3-6 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 21K00279）による研究成果の一部である。

注

注１　①『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』（［2005･11］和泉書院）、②「軍記物語の形容詞対照語彙表」（『大阪国際大学紀要国際研究論叢』21-3［2008･3］）、③「今昔物語集の形容詞対照語彙表―天竺･震旦部―」（同 22-3［2009･3］）、④「今昔物語集の形容詞対照語彙表―本朝仏法部―」（同 23-1［2009･10］）、⑤「今昔物語集の形容詞対照語彙表―本朝世俗部―」（同 23-2［2010･1］）、⑥「『時代別国語大辞典　室町時代編』の形容詞」（同 25-2［2012･1］）、⑦「『邦訳　日葡辞書』の形容詞」（同 26-1［2012･10］）、⑧「狂言の形容詞」（『大阪国際大学･大阪国際大学短期大学部紀要国際研究論叢』27-2［2014･1］）、⑨「キリシタン資料の形容詞」（同 27-3［2014･3］）⑩「擬古物語の形容詞」（同 29-1［2015･10］）、⑪「中世の日記・紀行文の形容詞」（同 29-2［2016･1］）等

注２　時代区分は基本的に CHJ に従ったが、平安時代については、『平安時代語新論』（築島　裕［1969･6］東京大學出版会）で示された時代区分を参考にし、「平安初期」「平安中期」を「平安時代前期」とし、「平安後期」「院政期」を「平安時代後期」とした。

注３　国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス』
https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/（2021 年 9 月 15 日確認）

注４　CHJ では鎌倉時代に分類されているが、本稿では成立年に基づき平安後期の作品として分類した。

注５　「『日本語歴史コーパス　平安時代編』形態論情報の概要」（［2014･3］、国立国語研究所）
https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/doc/abstract-heian-2016.pdf